

Title	拒絶感受性が他者からの曖昧な拒絶後の選択的注意に及ぼす影響
Author(s)	相田, 直樹; 磯部, 智加衣
Citation	対人社会心理学研究. 15 p.39-p.44
Issue Date	2015
oa:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54426
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

拒絶感受性が他者からの曖昧な拒絶後の選択的注意に及ぼす影響¹⁾

相田直樹(東京大学大学院人文社会系研究科)

礒部智加衣(千葉大学文学部)

人は、所属欲求のため、拒絶された後に笑顔へ注意が向くことが示されている(DeWall et al., 2009)。また、拒絶感受性が高い人は平時において拒絶顔から注意をそらす傾向があることが知られている(Berenson et al., 2009)。拒絶感受性とは、不安をもって拒絶を予測し、素早く知覚し、過敏に反応する特性である。曖昧な拒絶後に、拒絶感受性が高い人は笑顔に注意を向けることができるだろうか。本研究ではドットプローブ課題を用いて、次の代替仮説を検討した。拒絶感受性が高い人は、曖昧な拒絶後に笑顔に注意を向ける、もしくは、拒絶顔に注意を向けるだろう。実験の結果はこれらの仮説に反し、拒絶感受性が高い人は、拒絶を経験しない統制条件において、拒絶顔に対する注意を高めることのみが示された。つまり、曖昧拒絶条件における選択的注意は、拒絶感受性による影響を受けなかった。拒絶感受性と不適切な反応の関係について考察した。

キーワード：拒絶、拒絶感受性、選択的注意、ドットプローブ課題

問題

人にとって、受容されることは非常に重要である。MacDonald & Leary(2005)は、社会的受容や拒絶について変わりゆく状況に適応するために、拒絶の手がかりに対する適切な警告システムを必要としたと述べている。そして、人は拒絶の手がかりへの素早い反応に動機づけられているとされる。また、拒絶された人は、他者からの受容を求めて対処行動をとるという(e.g., Smart Richman & Leary, 2009)。しかしながら、誰しもが適切な対処ができるとは限らない。Downey & Feldman(1996)は、拒絶感受性が高い人は、拒絶に過剰反応し、そのため適応的な対応を取ることができないとしている。そこで本研究では、拒絶に対する反応の中でも特に初期的な認知反応に焦点をあて、拒絶感受性の調整効果を検討する。

拒絶に対する初期的な認知過程に及ぼす影響

拒絶とは、ある個人や集団から求められていないことを明白に宣言されることである(Williams, 2007)。人は他者と関係を形成し維持したいという欲求(所属欲求)を持ち、拒絶によりこの欲求が満たされないと深い喪失感が生じるという(Baumeister & Leary, 1995)。また、人は拒絶された後、所属欲求を回復するために新たな社会的絆を築くことに動機づけられるとされる。そのため、受容される機会があれば、その機会を獲得しようとすることが示されている。例えば、Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller(2007)は、拒絶されることによって他者と一緒にいたいという欲求が増加することを示している。また、拒絶された実験参加者は他者の意見に同調しやすいことも示されている(Williams, Cheung, & Choi, 2000)。この

ようなメカニズムは、拒絶経験後の初期的な低次の認知過程における検討でも支持されている。

DeWall, Maner, & Roudy(2009)は、視覚探索課題によって、拒絶経験後に、受容のサインを意味する笑顔により早く注意を向けることを示した。Experiment 4では、まず、実験参加者が後に相互作用をする予定の初対面の人に対してビデオメッセージを送った。その後実験者が、その相手が実験参加者と会いたがっていないことを実験参加者に伝えることによって、実験参加者に拒絶を経験させた。次に、ドットプローブ課題を用いて選択的注意を測定した。ドットプローブ課題では、感情を含む顔刺激と含まない顔刺激を左右に対呈示し、その後左右どちらかに呈示されるドットに素早く反応することを求めた(e.g., Fox, Russo, Bowles, & Dutton, 2001)。結果、拒絶を経験した実験参加者は、拒絶を経験していない実験参加者よりも、笑顔に注意を向けていたことが示された。笑顔は他者と協調したい気持ちを伝えることから(Parkinson, 2005)、拒絶経験後に他者からの受容を求めて笑顔に注意を向けたと考察されている。

また、Bernstein, Young, Brown, Sacco, & Claypool(2008)は、拒絶経験後に、「本当の」笑顔(Duchenne smile)と偽りの笑顔を弁別する能力が高まることを示した。そして、拒絶の経験により、すでに危機的な状況にいる人にとっては、親和性を偽る個人にコストを払うことの損失が大きいため、真の笑顔を見極める能力が高まると主張している。以上の結果は、一貫して、拒絶経験後に笑顔への注意が促進されることを示している。

拒絶感受性が初期的な認知過程に及ぼす影響

冒頭で述べたとおり、拒絶のサインへ素早く反応する

ことは重要である。しかしその一方で、拒絶のサインに過敏になりすぎることもまた問題であろう。拒絶の意図のない他者の行動に対しても拒絶されたと感じ、不適応な反応をしてしまうこともあるからである。拒絶そのものを経験しやすいかどうかには、個人差があることが知られている。Downey & Feldman(1996)は、幼少期に親に拒絶された経験が、対人関係における困難さを生じさせると主張し、この「心理的遺産」を拒絶感受性(Rejection Sensitivity; 以下 RS とする)と命名した。RS は、拒絶されることを不安に思い、拒絶を予期し、拒絶を素早く知覚し、敵意的な反応をとる特性として定義されている。RS の高い者(High RS; 以下 HRS とする)は、RS の低い者(Low RS; 以下 LRS とする)よりも、他者の行動が拒絶を意味するのかが曖昧な場面において、より「拒絶された」と感じるという(Downey & Feldman, 1996)。また、Downey, Mougios, Ayduk, London, & Shoda(2004)は、RS は拒絶から自己を防衛することを重要な目標とし、これによって拒絶の手がかりがどんなに小さなものであったとしても自動的に反応するとしている。

このような防衛的動機づけシステムは、選択的注意を用いた検討においても確認されている。Berenson, Gyurak, Ayduk, Downey, Garner, Mogg, Bradley, & Pine(2009)は、色を付けられた拒絶に関連するもしくは関連しない単語を呈示され、呈示された単語の色を答えるという感情ストロープ課題を用いて、HRS の選択的注意を検討した。結果は、拒絶に関連する単語が HRS の注意を妨げ、行うべき課題の遂行を妨害することを示していた(Study 1)。また、DeWall et al.(2009, Experiment 4)の手続きに類似したドットプローブ課題を用いて検討を行った結果(Study 2)、HRS は脅威を示す顔から注意をそらすことが示された。この注意回避は脅威経験を制御しようとする努力を反映していると考えられている。

曖昧な拒絶場面における選択的注意に拒絶感受性が及ぼす影響

本研究では、拒絶を経験した後の初期的な認知反応として、笑顔に注意を向けるという反応が、人一般の反応として確認されるかどうかを検討する。また、RS の程度により反応に違いが認められやすいと考えられる、曖昧な拒絶に焦点をあてる。曖昧な拒絶場面においても、笑顔に選択的注意が向けられるのか、その傾向は RS によって調整されるのか、について検討する。

拒絶の有無が曖昧な場面では HRS のほうが LRS より拒絶を知覚しやすいだろう。加えて、拒絶経験後に笑顔を求めるという現象が HRS にも当てはまるのであれば、HRS のほうが LRS よりも、拒絶経験後に笑顔に注意を

向けるはずである。

しかし、RS の先行研究が示している拒絶経験後における HRS の不適応な反応が、初期的認知においても認められるならば、異なる仮説が成り立つ。DeWall et al.(2009)は、拒絶がさらなる拒絶の可能性に対する異常警戒を生じさせ、拒絶の脅威に注意を向けるという反応につながる可能性を指摘している。この反応は、親密な関係を維持・形成する機会をふいにする不適切な反応と考えられる(Downey & Feldman, 1996)。RS の定義に基づけば、このような拒絶後における不適切な反応は、HRS によって行われやすいだろう。つまり、HRS は LRS に比べ、拒絶経験後に拒絶顔に注意を向けるという代替仮説が成り立つ。

一方、拒絶経験のない統制条件では、平常時の HRS の反応を検討した Berenson et al.(2009)と同様に、HRS は LRS に比べ拒絶顔から注意をそらすと考えられる。

なお本研究では、顔刺激として、笑顔・嫌悪顔・怒り顔を用いる。嫌悪は、望ましくない他者を自己から拒絶しようとする感情である(Rozin, Lowery, & Ebert, 1994)。同様に怒り顔はネガティブではあるが、必ずしも拒絶を意味しないだろう。つまり、嫌悪顔への注意が拒絶への注意をより反映するものだと考える。

以上より、本研究では、ドットプローブ課題を用いて以下の仮説を検証する。

仮説 1: 統制条件において、HRS は LRS よりも、嫌悪顔から注意をそらす。

仮説 2a: 曖昧拒絶条件において、HRS は LRS よりも、笑顔に注意を向ける。

仮説 2b: 曖昧拒絶条件において、HRS は LRS よりも、嫌悪顔に注意を向ける。

方法

実験参加者

国立大学の大学生 52 名であった。うち 4 名を実験手続きの不備によって分析から除外し、48 名(男性 28 名、女性 20 名、平均年齢 19.74 歳、 $SD=1.23$)を分析対象とした。

実験計画

実験条件(曖昧拒絶、統制)、RS(高群、低群)、顔刺激(怒り顔、笑顔、嫌悪顔)の 3 要因混合計画であった。顔刺激のみ実験参加者内要因とした。

質問紙

RS を測定するために、本多・桜井(2000)の日本語版拒否に対する感受性尺度を用いた。重要他者にはたつき

かける 18 の場面において、相手の反応が気になる程度(心配、 $\alpha = .80$)、相手が受け入れてくれると思う程度(予期、 $\alpha = .81$)についてそれぞれ 6 件法(心配:1「まったく気にならない」～6「非常に気になる」、予期:1「必ず断られる」～6「必ず受け入れられる」)で回答を求めた。心配得点と予期待点(反転)を掛け合わせた得点をそれぞれの項目において算出し、全 18 項目の平均値を算出した。RS 得点の中央値($Me = 13.02$)によって実験参加者を LRS(24 名、 $M = 11.19$, $SD = 1.54$)、HRS(24 名、 $M = 15.11$, $SD = 1.44$)に分類した(全項目の平均値が、その中央値と同じ実験参加者はいなかった)。HRS は LRS よりも有意に得点が高かった ($d(46) = 8.90$, $p < .001$)。

手続き

「初対面の人との会話と共同課題を通して印象がどのように形成されるか」という名目で実験参加者を募集した。会話課題終了後、それぞれの実験参加者に対して実験操作(曖昧な拒絶もしくは統制条件)を行った。両条件とも、予定されていた共同課題はできなくなったとして、その代わりにドットプローブ課題に取り組んでもらうと説明した。課題終了後、ディブリーフィングを行い、実験データ利用の同意を確認し、謝礼を渡し実験を終了した。

会話課題および実験操作

Downey & Feldman(1996, Study 2)の手続きを応用した。初対面かつ同性の実験参加者のペアを同時に実験室に呼び、対面する形で座ってもらった。初めに実験者が実験の流れについて教示した。具体的には、これから会話を 10 分間すること、会話終了後に共同課題をすることを伝えた。会話は実験者の退室とともに開始され、10 分経過後に実験者が再入室し、気分評定(詳細は後述する)に回答させた。その後、別々の部屋で実験参加者に実験操作を行う必要があるため、次の共同課題の準備という偽りの理由により、実験参加者のうちの一人を別室に移動させた。そして、以下のいずれかの操作を両実験参加者に行った。

曖昧拒絶条件では、実験者は「相手が次の課題ができない」と言ったため、共同課題が中止となると伝えた。これは、相手が共同課題をすることができない理由が実験参加者本人にあるか否かが不明瞭な表現であるため、曖昧な拒絶場面を意味する。一方、統制条件では「実験者の急用によって実験が中止となる」と伝えた。

選択的注意の測定

本研究では、選択的注意を測定するため、実験参加者に、ドットプローブ課題に取り組んでもらう必要があった。そのため、実験操作後に、実験者はもう一人の実験者を連れて再度入室した。そして、その新たな実験者が

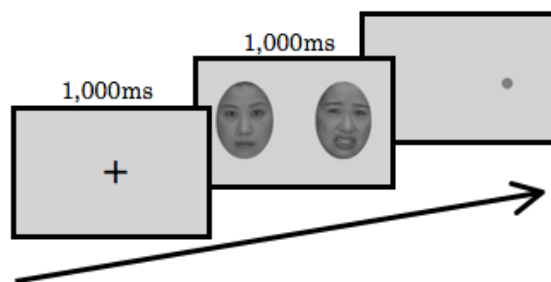


Figure 1 ドットプローブ課題手続き (一致試行)

「視覚探索課題における性差の検討」という目的で実験を行っているため、これからその実験に参加して欲しいと頼んだ。実験参加者から承諾を得た後、会話課題の実験者は退室した。その後、新たな実験者は、実験参加者に視覚探索課題と称したドットプローブ課題の説明を行った。

ドットプローブ課題は、DeWall et al.(2009, Experiment 4)にならい、刺激数、刺激呈示時間を設定した。顔刺激には、ATR 顔情報データベース(DB99)中の男性 4 名(M01、M06、M09、M10)、女性 4 名(F03、F10、F13、F16)の感情顔(怒り顔、笑顔、嫌悪顔)と中立顔を用いた。実験参加者は眼前約 57cm のコンピュータ画面を注視した。

注視点が呈示されてから 1,000ms 後に注視点の左右に顔刺激の対が 1,000ms 呈示された。顔刺激が消失した後、左右のどちらかにドットが呈示された。実験参加者は、ドットが出た方のキーをできるだけ速くかつ正確に押すように教示された(Figure 1)。ドットが感情のある顔刺激と同じ側に出る一致試行と、逆側に出る不一致試行の 2 種類あり、全ての顔刺激対について一致・不一致試行を行った。全試行数は 96 試行であった。

本試行の前に中立的イメージ(様々な文房具の画像)を用いた練習試行を 6 試行行った。課題終了後、気分評定に回答してもらった。

気分評定

会話課題終了後、及びドットプローブ課題終了後に、ネガティブ・ポジティブ・拒絶気分を測定するために、佐藤・安田(2001)の日本語版 PANAS のネガティブ 8 項目とポジティブ 8 項目、Downey & Feldman(1996, Study 2)で用いられた拒絶気分を尋ねる 5 項目(e.g., 拒絶された)のそれぞれについて 6 件法(1「まったくあてはまらない」～6「非常にあてはまる」)で回答を求めた。

結果

予備的分析

気分評定 ネガティブ($\alpha = .80$)・ポジティブ($\alpha = .84$)・

拒絶気分($\alpha = .84$)のそれぞれについて、平均値を算出した。会話課題終了後の気分評定において RS による差がないことを確認するために、実験条件×RS の分散分析を行ったところ、RS の主効果は有意でなかった($F_s < 1$, ns)。よって、実験条件の操作前の時点で RS 高低によって気分には差はなかった。

また、操作による気分の変化を検討するために、実験参加者ごとに、各気分の操作後の平均値から操作前の平均値を差し引くことで差得点を算出した。各気分の差得点において実験条件×RS の分散分析を行った。その結果、ネガティブ気分とポジティブ気分において、実験条件の主効果が有意傾向であった(ネガティブ気分: $F(1,44) = 3.53$, $p < .10$, ポジティブ気分: $F(1,44) = 3.96$, $p < .10$)。曖昧拒絶群の方が統制群よりも高いネガティブ気分(それぞれ $M = 0.43$, $M = -0.01$)及び低いポジティブ気分(それぞれ $M = -0.85$, $M = -0.40$)を報告していた。その他の有意な主効果及び交互作用は認められなかった($F_s < 1.7$, ns)。

反応時間データの除外 実験参加者の平均正答率は 99.61%、また、最低の正答率は 96.88%であった。全実験参加者の正答率が十分に高かったため、全実験参加者を分析対象者とした。ただし、反応時間の平均値から $\pm 2SD$ 以上離れた反応時間であったデータ及び不正解試行の反応時間のデータを除外し、以降の分析を行った。

注意バイアス得点の算出 不一致試行における反応時間の平均値から一致試行における反応時間の平均値を差し引くことによって注意バイアス得点を求めた。感情を含む顔に注意が向いているほどこの得点が高くなることを示している²⁾。

仮説の検証

怒り顔、笑顔、嫌悪顔それぞれの注意バイアス得点を従属変数とした実験条件×RS の多変量分散分析を行ったところ、RS の主効果が有意($F(3,42) = 4.12$, $p < .05$)、

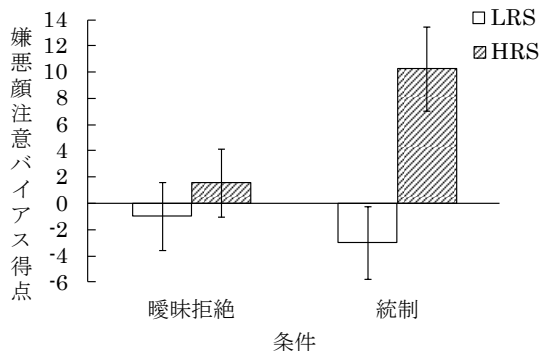


Figure 2 嫌悪顔注意バイアス得点
※誤差棒は標準誤差である

Table 1 怒り顔・笑顔注意バイアス得点の平均値と標準誤差

	怒り顔				笑顔			
	曖昧拒絶		統制		曖昧拒絶		統制	
	LRS	HRS	LRS	HRS	LRS	HRS	LRS	HRS
平均	-3.31	-0.24	-0.36	5.45	2.97	0.90	-3.86	5.47
SE	3.63	2.83	2.71	5.73	4.33	3.54	3.08	4.02

実験条件と RS の交互作用が有意傾向であった($F(3,42) = 2.45$, $p < .10$)。よって、それぞれの顔刺激の注意バイアス得点において一変量分散分析を行った。

嫌悪顔を従属変数とした実験条件×RS の分散分析を行ったところ、RS の主効果が有意であった($F(1,44) = 8.73$, $p < .01$; Figure 2)。HRS($M = 5.19$, $SE = 2.04$)は、LRS($M = -2.15$, $SE = 1.73$)よりも嫌悪顔に注意を向けていた。また、実験条件と RS の交互作用が有意傾向であった($F(1,44) = 4.05$, $p < .10$)。下位検定を行ったところ、HRS は、曖昧拒絶条件($M = 1.55$, $SE = 2.18$)よりも統制条件($M = 10.28$, $SE = 3.21$)において嫌悪顔に注意を向けていた($F(1,44) = 5.33$, $p < .05$)。また、統制条件において LRS($M = -2.99$, $SE = 2.31$)よりも HRS($M = 10.28$, $SE = 3.21$)の方が嫌悪顔に注意を向けていた($F(1,44) = 12.33$, $p < .01$)。怒り顔及び笑顔については実験条件と RS それぞれの主効果、実験条件と RS の交互作用は有意でなかった($F_s < 2.2$, ns)。怒り顔及び笑顔についての平均値を Table 1 に示した。

考察

本研究における仮説は、全て支持されなかった。まず、拒絶のない状況において、HRS は嫌悪顔に注意を向けていた。これは、Berenson et al.(2009)で示された、HRS は拒絶の顔から注意をそらすという知見と逆の結果である。さらに、多変量分散分析の結果より、HRS は拒絶のない状況において、表情に関わらず顔刺激に注意を向けやすいといえる。つまり、従来の研究では拒絶に対して異常警戒していることが主張されてきたが、本研究の結果は、HRS が常に他者の表情に注目していることを示唆している。

また、曖昧拒絶条件では、HRS は嫌悪顔への注意が少なかった。しかし、笑顔への注意を向けられることはなかった。よって、拒絶から回避しようと嫌悪顔から注意をそらす一方で、所属欲求を満たすために笑顔へ注意を行うという方略をとることはできなかったといえる。一方 LRS は、統計的に有意ではないが、曖昧な拒絶を経験した後に、怒り顔から注意を背け、笑顔に注意を向けており、所属欲求を満たそうとしている可能性がある。

以上、本研究の結果から、拒絶後に笑顔への注意が高まるという傾向(DeWall et al., 2009)は、曖昧な拒絶状

況では弱まること、また個人差(RS)によって調整されることがわかった。仮説を支持するものではなかったが、HRS が拒絶に関する適切な対応をとることができない可能性は示された。すなわち、HRS は、平常時においては他者の顔色を気にし、曖昧な拒絶経験後に笑顔への注意を向けることができなかった。一方、LRS は、統制条件においては他者の感情に必要以上の注意を払わず、拒絶経験後に選択的注意を行い、脅威から免れようという方略をとっている可能性がある。

ただし、本研究の結果の解釈には慎重にならなければならない問題がある。まず、本研究の統制条件の結果と Berenson et al.(2009, Study 2)の結果との差異は、刺激呈示時間の違いから説明可能であることがあげられる。本研究では DeWall et al.(2009, Experiment 4)にならって刺激呈示時間を 1,000ms としたが、これは Berenson et al.(2009)の刺激呈示時間(500ms or 1,250ms)と異なる。刺激呈示時間が長くなると一度注意を向けた場所へ再び注意を向けるのが遅くなる現象(Inhibition of Return; Colzato, Pratt, & Hommel, 2012)が知られている。この現象のために、本研究の統制かつ HRS 条件において、嫌悪顔からの注意回避が測定されなかった可能性が考えられる。この問題を考慮し、今後の実験では刺激呈示時間とそれに伴う予測を精緻化する必要がある。

次に、母集団における RS 得点の違いによる差を反映している可能性もある。欧米人に比べ日本人の RS 得点は高いことが示されている(佐藤・結城, 2010)。曖昧な拒絶を経験した後に笑顔に注意が向かなかったという結果、そしてそれは LRS においても認められた(有意ではなかった)という本研究の結果は、拒絶が曖昧だったことによる結果ではなく、日本人における RS の高さが影響したという考察も成り立つ。

本研究の結果は RS 特性の理解においても価値のあるものである。RS と拒絶に対する反応における研究の多くは、行動指標や気分評定を用いており、即時的な反応を扱っている研究は少ない。本研究の結果から HRS は、笑顔に注意を向けなかったことから、拒絶経験後に所属を希求しない可能性も考えられる。行動指標を用いた検討において、HRS は拒絶経験後にパートナーに対して攻撃的な言動をするという研究もある(e.g., Downey, Feldman, & Ayduk, 2000; Downey, Freitas, Michaelis, & Khouri, 1998)。Williams(2007)は、拒絶は少なくとも 4 つの基本的欲求(i.e., 所属への欲求、高自尊心への欲求、社会的環境統制への欲求、有意味な存在への欲求)を脅かすとしている。HRS は拒絶経験後

に、再結合の可能性を低く見積もるために、所属欲求を満たす戦略をとろうとしない、もしくはとれない可能性がある。その代わりに、自尊心を高めようとしたり、存在の有意味性を示そうとしたりすることが考えられる。再結合の可能性を操作した上で、初期的認知の測定と各欲求の測定を合わせて行うことで、HRS の不適応行動にいたるメカニズムの詳細が明らかになると考えられる。

引用文献

- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need for belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Berenson, K. R., Gyurak, A., Ayduk, Ö., Downey, G., Garner, M. J., Mogg, K., Bradley, B. P., & Pine, D. (2009). Rejection sensitivity and disruption of attention by social threat cues. *Journal of Research in Personality*, **43**, 1064-1072.
- Bernstein, M. J., Young, S. G., Brown, C. M., Sacco, D. F., & Claypool, H. M. (2008). Adaptive responses to social exclusion: Social rejection improves detection of real and fake smiles. *Psychological Science*, **19**, 981-983.
- Colzato, L. S., Pratt, J., & Hommel, B. (2012). Estrogen modulates inhibition of return in healthy human females. *Neuropsychologia*, **50**, 98-103.
- DeWall, C. N., Maner, J. K., & Rouby, D. A. (2009). Social exclusion and early-stage interpersonal perception: Selective attention to signs of acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 729-741.
- Downey, G., & Feldman, S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.
- Downey, G., Feldman, S., & Ayduk, O. (2000). Rejection sensitivity and male violence in romantic relationships. *Personal Relationships*, **7**, 45-61.
- Downey, G., Freitas, A. L., Michaelis, B., & Khouri, H. (1998). The self-fulfilling prophecy in close relationships: Rejection sensitivity and rejection by romantic partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 545-560.
- Downey, G., Mougios, V., Ayduk, O., London, B. E., & Shoda, Y. (2004). Rejection sensitivity and the defensive motivational system. *Psychological Science*, **15**, 668-673.
- Fox, E., Russo, R., Bowles, R., & Dutton, K. (2001). Do threatening stimuli draw or hold visual attention in subclinical anxiety? *Journal of Experimental Psychology: General*, **130**, 681-700.
- 本多潤子・桜井茂男 (2000). 日本語版拒否に対する感受性尺度の作成 筑波大学心理学研究 **22**, 175-182.
- MacDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt?: The relationship between social and physical pain. *Psychological Bulletin*, **131**, 202-223.
- Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection?: Resolving the "porcu-

- pine problem.” *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 42-55.
- Parkinson, B. (2005). Do facial movements express emotions or communicate motives? *Personality and Social Psychology Review*, **9**, 278-311.
- Rozin, P., Lowery, L., & Ebert, R. (1994). Varieties of disgust faces and the structure of disgust. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 870-881.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成性格心理学研究, **9**, 138-139.
- 佐藤剛介・結城雅樹 (2010). 関係流動性が拒絶感受性と対人恐怖傾向に与える影響—国際比較を用いた検討— 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 230-231.
- Smart Richman, L. & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: A multimotive model. *Psychological Review*, **116**, 365-383.
- Williams, K. D. (2007). Ostracism. *Annual Review of Psychology*, **58**, 425-452.
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effect of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 748-762.

註

- 1) 本研究は、科研費(若手(B)22730480)の助成を受けて行われた研究の一部である。また、論文の考察において東京大学文学部・村本由紀子准教授にご助言を頂いた。ここに記して感謝いたします。
- 2) 一致試行・不一致試行のそれぞれにおいて、各顔刺激の反応時間を従属変数とした実験条件×RS の多変量分散分析を行ったが、主効果及び交互作用は有意でなかった($F_s < .15$, *ns*)。

Effect of Rejection Sensitivity on the selective attention following ambiguous rejections

Naoki AIDA (*Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo*)

Chikae ISOBE (*Faculty of Letters, Chiba University*)

It has been demonstrated that after an experience of being rejected, individuals pay increased attention to smiles, because of their fundamental need to belong (DeWall et al., 2009). Other research suggests that people with high rejection sensitivity tend to avoid attending to faces showing rejection (Berenson et al., 2009). Rejection sensitivity is the disposition to anxiously expect, readily perceive, and intensely react to experiences of being rejected. Do rejection sensitive people also attend to a smile after experiencing an ambiguous rejection? In this study, we used the dot-probe task and examined the following predictions after an ambiguous rejection: highly rejection sensitive people would pay attention to (i) a smiling face, or (ii) a disgust face. Contrary to these predictions, results indicated that in the control condition, in which there was no rejection, highly rejection sensitive people highly attended only to the disgust faces. On the other hand, in the ambiguous rejection condition, selective attention was not affected by rejection sensitivity. We have discussed the relationship between rejection sensitivity and inappropriate reactions.

Keywords: rejection, rejection sensitivity, selective attention, dot-probe task.